

第28回江戸川乱歩賞受賞作

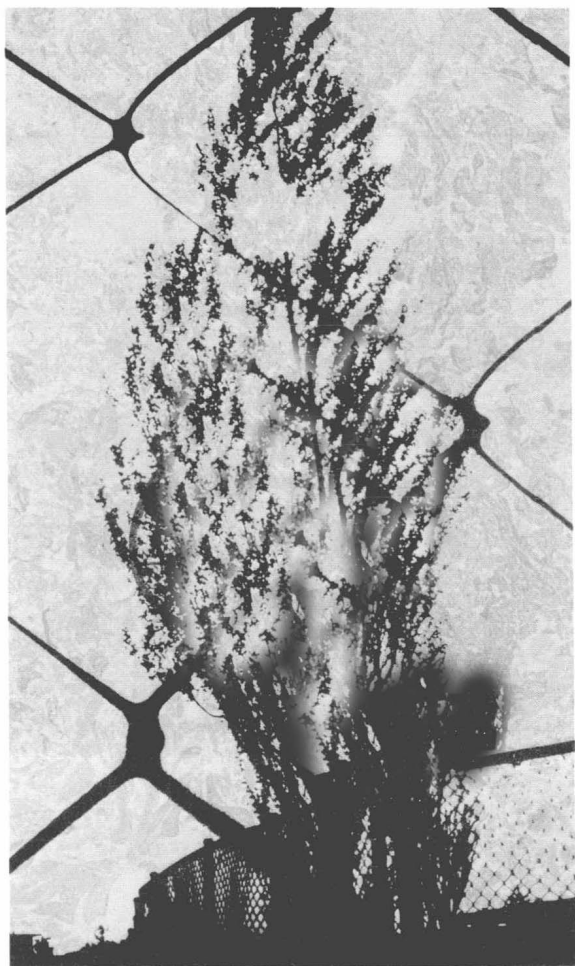
焦茶色のパステル

岡嶋二人



のパステル

岡嶋二人



講談社

焦茶色のパステル

昭和五十七年九月十日 第一刷発行

昭和五十七年十月七日 第二刷発行

定価 九八〇円

著者 岡嶋二人

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一・二二／郵便番号一一二

電話・東京(〇三)九四五一一二二(大代表)

振替・東京 八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

©岡嶋二人 一九八二年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN 4-06-200234-5 (0)

(文2)

目次

焦茶色のパステル	5
----------------	---

江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過	316
---------------------	-----

江戸川乱歩賞授賞リスト	321
-------------	-----

第二十九回（昭和五十八年度）江戸川乱歩賞応募規定	322
--------------------------	-----

装帧
野中
昇

焦茶色の パステル

1

喫茶店『ラップタイム』の壁に、大きく引き伸ばした馬の写真が掛かっている。その馬の尻尾が面白い形をしているのに、香苗は気付いた。

ショルダーバッグからスケッチブックを取り出し、カウンターのうへへ拡げた。6Bの鉛筆で馬の尻尾を描く。

疑問符を右倒しにしたような格好に、尾の先が跳ね上がっている。その尻尾が作り出した弧の中に、ぼんやりと四角いものが見えている。背景の白い建物が、すっぽりと尾にくるまれているのである。香苗は、その建物を紅水晶に見立てている。

淡い橙色の石で、小粒だがとても味わいがある。客の一人が、何になるかしらと預けていったもので、なかなかデザインが決まらなかった。

石の色からすれば、金よりは銀が合う。銀かプラチナだ。山路頼子はプラチナがいいと言うだろう。そのほうが、代金を高く請求できる。フーロチを考えていたが、ペンダントもいい、と香苗は思った。

量感をつけて、石を惹き立たせるために、スケッチに少し手を加えた。

「何ですか、それ」

カウンターの向こうから、マスターの真岡良太郎が香苗の手元を覗き込んだ。

「だめよ」

香苗は、笑いながらスケッチブックの上を押さえた。

月曜日の昼過ぎ。『ラップタイム』は空いている。客のあまりいない店の中は、ずいぶん広々として見えて気持が良かった。

この店には、競馬が好きで堪らないという連中が集まってくる。同じビルの四階に『パーフェクト・ニュース』という競馬予想紙を発行している会社があるのも、その一因だろう。月に何度かは、ここで競馬の「研究会」なる集まりが開かれる。むろん、香苗はそんな会合に出たことはない。馬のことなど、まるで訳が分からない。しかし、それでも香苗は、この『ラップタイム』が好きだった。週末の混んでいる日は避けるが、週の初めの数日、『ヤマジ宝飾』へ顔を出した日は、必ずここでコーヒーを飲む。店が、というより、このカウンターが好きなのかも知れない。厚さが三十センチほどもあるクルミ材で、磨き込まれた色合いと感触がなんとも言えない。広いカウンターの上にスケッチブックなど拡げていると、それだけで安心してしまうようなところがある。

「隆一さんから、何か聞いてませんか」

真岡が声を掛けた。タンブラーをくるくるっと拭き、それを光に透かすように持ち上げてから、棚の上へ並べている。

「何かって？」

「馬のことで、相談に乗って貰っていることがあるんですよ」

「知らないわ」

香苗はぶつきらぼうに答えた。

隆一が馬のことなど話してくれる訳がない。香苗が訊いたとしても、煩い顔をするだけだ。

「確かめといてくれるって、そう言ってたんですよ。そのままになつてゐるから、どうなったかなと思つて」

香苗は、黙つてスケッチブックの上に目を落とした。

「訊いてみてくれませんか。いや、僕だけの話じゃないもんで、他のやつらを待たせちゃつてゐるし」

「自分で訊いたらいいじゃないの」

「そりゃ、そうなんですけど、あれつきり見えないもんですから。忘れられちゃったんじゃないかな」

「馬のことでしょ。忘れる訳ないわよ」

私のことならともかく、と言いたいところを香苗は抑えた。

自分が不機嫌になつてゐるのが分かる。

「いや、実は、柄じゃないんだけど、僕、馬を持つとうと思つてゐんですよ」

真岡は香苗の気持にはお構いなく、一人で照れながら言つてゐる。それを誰かに聞かせたくて仕方がなかったらしい。

「馬を持つって……真岡さんが？」

「ええ、もちろん、僕一人じゃないんですよ。あ、いらっしゃい」

男が二人入つてきた。ぐるりと店の中を見回し、香苗を認めて近付いて来た。香苗はその二人を知らなかった。

一人は四十五、六。一人は、それより少し若い。

「大友香苗さんですか」

老けて見えるほうが言った。その口調は、どこか相手を身構えさせるようなものを含んでいた。

2

午後、二階で彫金教室の準備をしていると、教室の戸口に綾部芙美子が顔を覗かせた。

「香苗」

と小声で呼ぶ。ボニーテールに束ねた髪が、ぷらん、と肩先に掛かり、頭だけ教室の中へ差し入れている。これぞわ部屋を見回し、

「いる？」

と親指を立て、山路頼子の在室を訊いた。

「私だけよ」

香苗がそう答えると、芙美子はへっへっへと笑いながら、部屋の中に入ってきた。

「ウチとオタクの社長同士が夫婦ってのも、やり難いね。気を遣ってかなわんわ」

芙美子是这样いながら、作業台の上のバーナーを取り上げた。調節バルブを弄くり回し、香苗の方へ向けて「手を上げろ」などと言いながら、一人ではしゃいでいる。香苗は彼女の手からバーナーを取り上げ、ゴム管を差し込んで鞆につないだ。

綾部芙美子はこの山路ビルの四階にある『バーフェクト・ニュース』に勤めている。香苗が嘱託契約で入っている『ヤマジ宝飾』は一階、『ラップタイム』の隣にある。

山路亮介というのが『バーフェクト・ニュース』の主筆であり、社長。その妻頼子は『ヤマジ宝飾』の店主であった。

香苗は、自分でデザインした装身具や小物を『ヤマジ宝飾』へ納めるかたわら、店が開講している

彫金教室の講師を務めている。

準備を終えてひと息吐くのを待っていたように美美子が訊いた。

「ねえ、さっき刑事が行ったでしょ。何だったの？」

香苗は首を振った。

「訳が分からないのよ」

『ラップタイム』のテーブル席へ移り、刑事は香苗に、

「大友隆一おともりゅういちさんは、ご主人ですね」

と訊いた。話するのは専ら年上のほうの役目らしく、もう一人の刑事は、時折メモを取りながら黙ったままでいた。

「今、どちらにおられますか」

「さあ、今朝早くから出掛けましたけど、行き先を申しませんもので……」

「お帰りは？」

「それも……。どこか遠方だと思えますけれど」

「旅行の支度でもされて出られたんですか」

「いえ、そんな大袈裟おおげさなものじゃありませんけど、昨晚、電話が掛かって、明日の急行でそちらへ伺う、というようなことを言っておりましたから」

「電話ね。どこからの電話だったか、分かりますか」

「さあ……、私が電話を取りまして、名前を伺ったような気が致しますけど、ちょっと取り紛れておりまして」

「ああ、覚えておられない？」

「申し訳ありません。あの、主人に何か？」

「電話は、男の方だったですか」

「え、あ、はい」

「初めて聞く声でした？」

「ええ、ウチに掛けられたことは、これまで無かったように思いますけど」

「そうですか。——昨日、ご主人は？ お宅におられました？」

「いえ、土曜日は、いつも競馬場です」

それが隆一の仕事なのだ。隆一は、競馬評論家という肩書きを持っている。さほど売れてはいない。

「競馬場、ああ、なるほどね。府中ですね」

「はい」

「どなたかとご一緒だったんですね」

「さあ……、私は何も聞いておりませんもので……」

「ご主人は、お仕事の話をお宅でされませんか」

「はい、何も」

「私ですか。そうですか。多いですよ、そういうお宅は」

慰めてくれたつもりなのだろうか。だとしたら、一体、何を慰めたのだろう。

「それで、昨日ご主人が帰られたのは、何時頃でした？」

「……八時頃だったと思いますけど」

「八時頃ね。そうですか」

「あの、何か……」

「いえね、ちよつとご主人にお会いして、伺いたいことがあるんです。大友隆一さんは、東陵農業大

学のご出身ですね」

「はい……」

「柿沼さんて方、ご存知ですか。柿沼幸造さん」

「いえ、知りません」

「ご主人のお知り合いだと思うんですが」

「さあ……、聞いたことがありますけど」

「そうですか。東陵農大の講師をされてた方でしてね。ご存知ないですか……」

「その方が、何か？」

「先週の月曜にね、ご主人は茨城県の伏砂ふくさに行かれてるんですね。東陵農大に。そこで柿沼さんと会っておられるんです」

「……………」

「大学の人の話だと、何か内密な話があったようなんですがね。どんなご用件だったのか、伺いたいと思ひましてね」

「……………」

「ご存知ないようですね。そうですか。いや、また伺うかも知れませんが、ご主人、お戻りになったら、ここへご連絡を頂きたいんですが」

「そう言つて、刑事は香苗に名刺を差し出した。」

「はい……、あのう、一体どういう」

「ああ、その柿沼幸造さんが殺害されましたね。一昨日おとといの昼頃だったですがね」

「サツガイ？」

美美子が声を上げた。その言葉の響きが、どこか外国語のように聞こえた。

香苗は作業台に腰を乗せ、足を宙に揺らせている。美美子はその作業台の周りをぐるぐる歩き回っている。

「どんなふうに殺されたんだろう」

「知らない。聞かなかった」

「土曜の昼頃って言ってたわね。ウチの人間、誰か会ってる筈よ」

「会ってる？」

「隆一さんとさ」

「ああ……」

隆一に人を殺すようなことが出来るとは思えない。殺人は感情的な犯罪だと、香苗は思っている。激しい感情を持った人間だけが、人を殺す。隆一は冷たい。彼が人に与える温か味のある印象は、あれは作り物なのだ。隆一には、喜びも、怒りも、悲しみも無い。すべて偽物だ。彼には、コソ泥とか、詐欺のような偽物の犯罪が似合っている。

隆一に、人は殺せない。

「東陵農大なんて大学、あったんだねえ。隆一さん、そんなとこ出たのか。誰か他に出身者、いるかなあ……」

美美子が呟き、香苗は彼女を見た。

「いそうもないな。ロクな奴いないからな、ウチには」

「いたら、どうしようっていうの？」

「だって、何か話が聞けるかも知れないしさ。必要とあれば、紹介状貰って、大学に行ってみることだって出来るじゃない」

「何の必要よ」

「香苗、興味ない？ 自分のダンナが警察に追われててき。現在のところ行方不明ってんでしょ」

「追われてる訳じゃないわ。興味ない」

教室の戸口に人影がした。

「おはようございます」

生徒の一人が入って来た。香苗は作業台から下りて、「いつも、あなたが一番なのね」と、生徒に言った。

芙美子は香苗に目で、あとで、と合図し、ここそと部屋を出て行った。歩きながら喋っている芙美子の声が部屋に残った。

「妻の証言。わたくしは、何も存じませんでした……」

3

教室を終えたのは三時半だったが、後片付けを済ませた香苗が『ヤマジ宝飾』の事務室へ下りた時は四時が近かった。店の奥に狭苦しい部屋があつて、『ヤマジ宝飾』ではそこを事務室にしている。

香苗は、パートの須藤直子に断わり、机の上に日報を書くための隙間を作つて貰った。在庫品は一応、裏のマンションの一室を倉庫代わりにして、そこへ置くことになっているのだが、結局、事務室も倉庫とたいして変わりが無い。机だろうが床だろうが、品物のケースが積み上げてある。無断で動かすと叱られる。

「社長は？」

店を覗いてみて、香苗は直子に訊いた。

「メーカーさんに行きましたよ。ちっとも良いものを寄越さないから、自分で見て来るって。もう、帰って来るんじゃないですか」

香苗は頷き、日報を書き始めた。直子がまだそこへ立っている。香苗は顔を上げた。

「店のほう、いいの？」

「警察の人が来たんですって？」

睫をバタつかせて、直子が訊いた。

もう、止してよ、と香苗は手を振った。

直子は、おいとむかれて店へ出て行った。短大を出たばかりだと言う。綺麗な素顔を化粧で塗り潰して台無しにしている。

香苗は溜息を吐いた。

日報を書き上げたところへ、芙美子が入って来た。手に大きな茶封筒を抱えている。

「忘れてたんだ。これ」

と封筒を香苗に渡して寄越した。

「なに？」

「隆一さん宛てに来たラブレターの山」

香苗は封筒の口を開けて中を覗いた。

「ファンレター、バーの請求書、どっかの雑誌社からの絶縁状、等、等、等。あ、速達もあるって言うってたな」

香苗は封筒を自分のロッカーに放り込んだ。

隆一は『バーフェクト・ニュース』に記事を書いて載せている。自分の名刺を持たず、会社で作って貰ったものを配り歩くので、仕事関係の郵便物は殆ど会社に届く。芙美子は、それを持って来てく